

GEfIL 実践研究 PHASE1・PHASE2 総合シラバス

【時間割情報】

科目名	GEfIL 実践研究 PHASE1／GEfIL 実践研究 PHASE2
英科目名	GEfIL Independent Research Project
担当教員	グローバルリーダー育成プログラム推進室特任教員
開講時期	PHASE1：2016年1月～9月 PHASE2：2016年9月～2017年9月
単位数	PHASE1：2単位 PHASE2：2単位
使用言語	英語

【授業の概要と目標 (Course Objectives/Overview)】

概要

この科目は、自身が関心を有する地球規模で生じる「現実」の問題を対象として、創造的・学際的な研究プロジェクトを設計・実施することを目標とする。約1年半の主体的な学修を通じて、これまでに習得した基礎理論、分析方法、技術などを利用しながら、具体的な課題に取り組むことにより、論理的な思考による問題解決力を養い、実際の研究を体験する。各学生は、サステナビリティ、グローバル・ヘルス、グローバル・ガバナンス、ピース・ビルディング、ダイバーシティ、グローバル・エコノミー&マネジメントの6つの大きなテーマ群の中で、学生が自分で、または同様の問題意識を有するが異なる専門領域の学生で構成されるチームのメンバーと協同して、研究課題を設定し、TAやメンター教員の指導や助言を得つつ、研究プロジェクトを計画から発表まで実行する。

研究プロジェクトの企画・実施のサポートや、研究の進捗や問題点等について学生同士やTA、メンターのフィードバックを得るため、演習、ワークショップ、中間発表が定期的に行われる。最後に、「実践研究シンポジウム」で学生が自分の研究プロジェクトの成果を発表する。これらを全て英語で行う。

なお、GEfIL 実践研究の特徴の1つとして、研究型総合大学としての東京大学が有する知のネットワークを最大限活用できることが挙げられる。学生は、GEfIL 実践研究を通じて、海外大学等の著名な研究者、企業や国際的な専門家によるセミナー等に企画段階から参画することができ、ここで得た知見を研究プロジェクトに反映することができる。

GEfILには、専門や関心が異なる多様で優れた学生が、学年を越えて参加する。このような多様で優れた学生、研究者、企業等の専門家との交流体験は、国際的なネットワーク形成、キャリアデザインにおいて極めて意義のあるものとなるはずである。

目標

- ☆ 学際的や国際的な課題に関わる知識を習得している。
- ☆ グローバル問題の解決策立案方法を習得している。
- ☆ 企画立案、設計などにおける創造的思考能力を習得している。
- ☆ 研究資料、実験、データなどの収集及び分析方法を習得している。
- ☆ 学修・研究プロジェクトの時間管理を適切に行うことができる
- ☆ 研究倫理の基礎知識と遵守について十分に理解している。

- ☆ 学際的・国際的なチームで協調する能力、効果的なコミュニケーション能力を身につけている。
- ☆ 英語による効果的なプレゼンテーションと議論能力を身につけている。

【授業キーワード (Keywords)】

東京大学 GEfIL 実践研究、GLP II、グローバル・アジェンダ、アカデミック・スキル、学際的研究、等

【授業計画 (Schedule)】

実践研究は、PHASE 1 (2 年次 1 月から 3 年次 9 月) 及び PHASE 2 (3 年次 9 月から 4 年次 10 月) からなる。PHASE 1 では、「現実」のグローバルな課題をテーマにしながら研究過程 (scaffolded research process; structured, semi-independent research) の実践を通じて、学際的研究スキル (transdisciplinary/interdisciplinary research skills)、研究計画の企画・立案、研究倫理、チームで学際的な研究の仕方、発表に関する能力を身につける。また、中間的な研究成果をプレゼンテーションやレポートとして取りまとめる。(2~5 頁)

PHASE 2 では、**テーマ群ごとに本格的な実践研究を行う**。主幹メンター教員や TA のゼミ等を通じて研究を深化させるとともに、後輩への助言等の経験を自身の研究活動にもフィードバックし、最終的な研究成果を取りまとめ、発表する。(6~11 頁)

※ 授業は原則として、土曜日に行う。また、授業の進行の度合いによっては、予定を変更することがある。

PHASE 1

◆ 第 1 週 (2 年次 1 月 9 日、駒場)

学生が申請書に表していた「地球規模の問題」に基づいて、シナリオを作成する。そのケーススタディーが、PHASE 1 の学際的研究スキル練習の一つの基礎となる。

1. 説明会【全体】<1 時間>

本授業の目標、流れ、計画を説明する。また、第 1 週のながれを説明する。

2. 問題意識／提起・アクションプラン<4 時間>

チーム・ビルディング：チーム・ビルディング・エクササイズを行ってから、チームがグループワークのためにガイドラインを議論し、作成する。

アクションプラン：チーム別にケーススタディーの課題をいかにして解決できるかと議論しながら、アクションプランを立ち上げる。アクションプラン立案により、学生がある問題の全体像及び複雑性を探求し、複数の視点といかにして携わることができるのかを体験する。

発表：クラス全体に、チームがアクションプランを発表し、学生同士や TA とメンターのフィードバックを得る。

◆ 第 2 週 (2 年次 1 月中旬)

独習：チームのケーススタディーについて、背景情報・状況を調べる。

◆ 第 3 週 (2 年次 1 月 23 日、本郷)

問題「図」の作成（チームで）＜2.5時間＞

この練習は、ある問題の様々な要因とその因果関係を表し、いくつかの関係する視点や知識領域を突き止め、さらに研究活動の焦点を定める目標とする。TA やメンターのガイダンスとフィードバックを伴う。

- i. アクションプラン及び前週の「独習」で得た情報に基づいて、学生が問題の様々な原因や影響を及ぼす要因を図等で描く。
- ii. 問題を深く理解するために、考察すべき知識領域（複数）や様々のステークホルダー視点を表明する。
- iii. さらにチームの研究活動の焦点を定め、研究（学修）課題のリストを作成する。

練習：抜き読み ＜1時間＞

研究課題に関連する英語の学術論文をいかに抜き読みすることができるかについて練習する。ループリックを利用し、自己評価を行う。

（その他）サマープログラムの説明会＜2時間＞

学生は、2月上旬までに、3つの希望するプログラムを選択し、データベースに記入する。

◆ 第4週（2年次1月下旬）

独習：チームのケーススタディーについて、引き続き背景情報・状況を調べる。

◆ 第5週（2月6日、駒場）＜6時間＞

【全体】練習＜1.5時間＞

文献研究や情報・データ収集の方法、また、文献目録と基本的な文献・データ管理システムを作成する仕方を練習する。また、ループリックの作成と利用方法を習得する。

【全体】研究倫理とは＜1時間＞

講義及び練習（例、調査票を倫理的問題において分析、修正）を行う。

【チーム別】今後の文献研究と情報・データ収集を計画する＜1.5時間＞

チームメンバー間で、文献研究及び情報収集の分割、タスクの締切等を決定する。チームの研究プロジェクトに適切及び倫理的な調査方法を考察し、計画を立ち上げる。チーム中の相談・議論・フィードバックのために、ツール（ブログ等のソーシャルメディア、Google Dropbox など）の同意や準備を行う。

（その他）＜2時間＞ サマープログラムに関する個別相談

今年参加するサマープログラムについて個別相談を行う。その際、必要に応じて、主幹メンター教員のアドバイスを得る。

◆ 第6～7 週間（2月中旬）

独習：文献研究や情報・データ収集

自分の研究プロジェクトを実行するため、どのような知識、資料、実験、データ、分析方法等が必要になるのか。また、どのような研究ツールが必要になるのか。この3週間の間に、学生が自分の研究に必要な知識などを検討し、学習計画を立て、研究に必要な要件や機器（アーカイブ入館、フィールドワーク、ラボ時間、インタビュー、データ、資料、資金など）について計画書を作成し、TA とメンターにフィードバックのため提出する。

◆ 第8週（2月27日、本郷）＜5時間＞

練習1「評価と統合」＜2.5時間＞：

【全体】検討した文献や収集した情報・データをいかに評価することができるかといくつかの具体的な例で練習する。

【チーム別】 メンターやTAの指導で、情報の評価基準と学際的研究のための総合枠組み (synthesizing framework) を考案し、今まで収集した情報を評価するとともに、今後の研究 (方向) を議論や設定する。

練習2「学際的な研究方法・ツール」 <1.5時間>

チーム毎に、まだ利用していない学際的な研究方法・ツール (例、可視化 (e. g. rich picturing)、シミュレーション、ゲーム、デザイン等) を与える。その方法の利益と問題点を探求・検討する。

◆ 第9～13週 (3月)

独習: 研究をさらに深めるため、文献研究、情報収集、またループリックを利用し、資料の評価を行う。

◆ 第14週 (3年次4月9日、駒場) <6時間>

発表1: 予備段階の研究結果について全チームの「会議」を行う

【チーム別】 <1.5時間>

チームで、メンバーの調査・研究の予備結果を纏めて、「会議」のためにプレゼンテーションを準備する。教員やTAが支援する。

【全体】 <2.5時間>

チームの研究テーマ、そしてそこに追求してみたいアイデア、仮説、成果について全チームの会議で簡潔にプレゼンテーションし、問題解決のためチーム等の協力の必要性と方法について詮議する。さらに、今後の協同の進め方について議論する。「国際会議」のシミュレーションを通じて、受講者は自分の研究プロジェクトに関して、学生同士と教員のフィードバックを得ながら、地球規模の問題において多様な要因の相互関連性をより深く理解する。

【チーム別】 <2時間> チームワークのピア評価①。これを基に、メンターやTAが、今後の研究手順を学生チーム (毎) と話し合う。学生の質問、研究やチームワークの問題点、研究におけるニーズを相談する。

◆ 第15週 (4月中旬)

独習: 研究プロジェクトに関連する情報、資料、データを引き続き検討や分析し、また、研究の社会的応用性について考察する。

◆ 第16週 (4月23日、本郷) <約7時間>

(午前) 効果的な研究発表のスキル【全体及びチーム別】 <2.5時間>

効果的な発表について議論と練習を行う。この練習により、実践研究生は、専門家以外の者にもわかりやすく、且つ一貫性と説得力のあるプレゼンテーションの方法 (例、模擬のTEDトーク) を習得する。チームがステークホルダー向きにプレゼンテーションを作成及び改善する。

(午後) ワークショップ: 研究の社会的応用性について (研究とアクションプランの連係と可能性について) <3時間>

ケーススタディーの課題の実施や活動について、何人かの主幹メンター教員、多分野の専門家、起業家等のステークホルダーが講義し、学生チームとディベートする。また、学生チーム等が、自分の研究の応用性及びチームのアクションプランについてより実際的な観点からフィードバックを得ることができる。

相談会 1 <1 時間>：「GEfIL 共通授業」科目や PHASE 2 のテーマ群について、GLP メンター教員や主幹メンター教員と相談する。（学生は、5 月下旬までに PHASE 2 のテーマ群を選択する。）

◆ **第 17 週（4 月下旬）**

独習：学生チームが、前回の議論で得た結果を踏まえて研究を続けて、また、アクションプランの再検討や具体化を行う。

◆ **第 18 週（5 月 7 日、駒場） <3 時間>**

【全体及びチーム別】 <2 時間>

今まで得た様々なフィードバックを分析及び評価しながら、今後のチーム研究とアクションプランの実施方法を考察・調整する。また、最終発表（第 20 週）を準備する。GLP メンター教員や TA が支援する。

【チーム別】 <1 時間>

チームワークのピア評価②：今までのチーム研究過程、そして個別の貢献について自己評価及びピア評価を行う。

◆ **第 19 週（5 月中旬）**

独習：チームが、最終の（協同）発表を作成する。さらに、学生が PHASE 2 のために、自分の研究プロジェクトについて考察する。

◆ **第 20 週（5 月 21 日、駒場）**

発表 2： <6 時間>

午前：【全体】サマープログラムの派遣オリエンテーション <1.5 時間>

午後：【全体】チームごとのプレゼンテーションを行う。学生同士、TA、主幹メンター教員や GLP メンター教員がフィードバックする。チーム発表の評価も行う。 <2 時間>

相談会 2 <1 時間>：学生が【チームあるいは個別】、主幹メンター教員や GLP メンター教員と夏中に（PHASE 2 のテーマ群に関する）学習やフィールドワークについて相談する。

◆ **第 23～35 週（6 月～9 月）**

独習：独自の研究・フィールドワーク

この 12 週間の中に、学生が自分の選択されたテーマ群において、研究プロジェクトを準備し、フィールドワークや研究に関連するサマープログラム等に参加する。（あるいは、PHASE 1 の研究やアクションプランについてフィールドワークや研究に関連するサマープログラム等に参加する。）この期間に、TA やメンター教員が「実践研究生」（第 23 週以降、実質的に主体的な研究を行うという意味で当該呼称を用いている。）をサポートするため、定期的なゼミや指導セッションを手配することもある。

◆ **第 36 週（9 月上旬）**

研究成果報告書の提出

ここまでのチームワークや研究成果について個別の報告書を取りまとめ、提出する。

【PHASE 1 の成績評価方法】

40% 個別の報告書

40% チームのプレゼンテーション

10% チームワークのピア評価

10% チームワークや個別貢献のピア・自己評価

PHASE2

※PHASE2は、以下の内容で構成されるが、具体的な流れ・手順については、テーマ群毎に異なる。テーマ群の概要等については9頁以降を参照のこと。

◆ 第1～4週（3年次9月）

独習：独自の研究

テーマ群ゼミ：【テーマ群別】＜3～4時間＞

「実践研究生」は、自分の研究プロジェクトを実行する。

加えて、この間に開催されるテーマ群別ゼミに参加する。テーマ群別ゼミでは、現時点までの自分の研究の進捗状況や成果、研究過程に生じた問題点について発表し、学生同士、TA、メンター教員や企業関係者のフィードバックを得る。「実践研究生」は、参加者のコメントを考察しながら、研究の進捗状況等について、短いレポート（自己評価）を作成・提出する。

◆ 第5～9週（10月）

独習：独自の研究

テーマ群ゼミ：【テーマ群別】＜3～4時間＞

「実践研究生」は、自分の研究プロジェクトを実行する。

加えて、この間に開催されるテーマ群別ゼミに参加する。テーマ群別ゼミは、メンター教員及びTAがファシリテーターとなり、テーマ群の特性に応じたトピックに関する議論、関連分野における優れた研究者や企業、国際機関等の専門家を招いてのセミナー、ワークショップなどを行う。TAやメンター教員は、学生の研究を成功裡に終了するために、こうしたゼミや指導セッションを手配するが、この企画・立案・実施に際しても、「実践研究生」が主体的に参画することを期待する。「実践研究生」は、研究の進捗状況等について、短いレポート（自己評価）を作成・提出する。

◆ 第10～13週（11月）

独習：独自の研究

中間発表1：研究成果報告【テーマ群別】＜3～5時間＞

「実践研究生」は、自分の研究プロジェクトを実行する。

加えて、この間に開催される中間発表に参加する。教員や企業等関係者から、より実際の観点から研究の応用性等に関するフィードバックを得ることができる。「実践研究生」は、中間発表を踏まえ、短いレポート（自己評価）を作成・提出する。

◆ 第14～17週（12月）

独習：独自の研究

テーマ群ゼミ：【テーマ群別】＜3～4時間＞

「実践研究生」は、自分の研究プロジェクトを実行する。

加えて、この間に開催されるテーマ群別ゼミに参加する（テーマ群別ゼミについては、「第40～44週」を参照。）。「実践研究生」は、研究の進捗状況等について、短いレポート（自己評価）を作成・提出する。

◆ 第18～22週（1月）

独習：独自の研究

テーマ群ゼミ：【テーマ群別】＜3～4時間＞

「実践研究生」は、自分の研究プロジェクトを実行する。また、一部の学生は、新たに2年生を対象としたグループワーク等に参加し、助言等を行う。

加えて、この間に開催されるテーマ群別ゼミに参加する（テーマ群別ゼミについては、「第40～44週（10月）」を参照。）。「実践研究生」は、研究の進捗状況等について、短いレポート（自己評価）を作成・提出する。

◆ 第23～26週（2月）

独習：独自の研究

中間発表2：研究成果報告【テーマ群別】＜3～5時間＞

「実践研究生」は、自分の研究プロジェクトを実行する。また、一部の学生は、新たに2年生を対象としたグループワーク等に参加し、助言等を行う。

加えて、この間に開催される中間発表に参加する。教員や企業等関係者から、より実際の観点から研究の応用性等に関するフィードバックを得ることができる。「実践研究生」は、中間発表を踏まえ、短いレポート（自己評価）を作成・提出する。

◆ 第27～30週（3月）

（休業期間）

◆ 第31～34週（4年次4月）

独習：独自の研究

テーマ群ゼミ：【テーマ群別】＜3～4時間＞

「実践研究生」は、自分の研究プロジェクトを実行する。また、原則として全ての学生が3年生を対象としたグループワーク等に参加し、助言等を行う。

加えて、この間に開催されるテーマ群別ゼミに参加する（テーマ群別ゼミについては、「第40～44週（10月）」を参照。）。「実践研究生」は、研究の進捗状況等について、短いレポート（自己評価）を作成・提出する。

◆ 第35～39週（5月）

独習：独自の研究

中間発表2：研究成果報告【テーマ群別】＜3～5時間＞

「実践研究生」は、自分の研究プロジェクトを実行する。また、原則として全ての学生が3年生を対象としたグループワーク等に参加し、助言等を行う。

加えて、この間に開催される中間発表に参加する。教員や企業等関係者から、より実際の観点から研究の応用性等に関するフィードバックを得ることができる。「実践研究生」は、中間発表を踏まえ、短いレポート（自己評価）を作成・提出する。

◆ 第40～52週（6月～8月）

独習：独自の研究・フィールドワーク、研究成果発表の準備

この13週間の間に、学生が自分の研究プロジェクトを実行し、フィールドワークや研究に関連するサマープログラム等に参加する。この期間に、TAやメンター教員が「実践研究生」をサポートするため、定期的なゼミや指導セッションを手配することもある。

また、「実践研究生」は、この期間を活用し、チームメンバーと協同しつつ、自分の研究プロジェクトの結果を書き上げ、発表を準備する。

◆ 第53週（9月上旬）

プレゼンテーションリハーサルⅠ【テーマ群別】＜6時間＞

TAやメンター、そして「実践研究生」同士のサポートとフィードバックを受け取り、プレゼンテーションをリハーサルする。

◆ **第54週（9月中旬）**

プレゼンテーションリハーサル II【2～3テーマ群】＜6時間＞

このリハーサルは、「実践研究生」が、他の2～3テーマ群のチームと一緒に、つまり、より大きな聴衆の前で、自分の研究結果を発表する機会である。

◆ **第55～56週（9月中下旬）**

プレゼンテーションの最終編集・シンポジウム準備【テーマ群別】＜6時間＞

「実践研究生」がプレゼンテーションを最終的に編集し、「実践研究の特別シンポジウム」の準備を手伝う。

◆ **第57～58週（10月上中旬）**

実践研究の特別シンポジウム、2日間【全体】

※ PHASE2 では、上記に加えて、「グローバルリーダー講義」の講演者の一部選定、交渉、運営等に学生が直接参画する。

【授業の方法（Teaching Methods）】

本授業は、学生個々による主体的な研究活動に加えて、グループワークをはじめとする相互学習形式を多く取り入れる。また、学生は、ゼミやセミナー等の実施に際し、企画段階から参加し、教員、企業関係者等とも協同しながら、授業を作り上げていくことが求められる。

【成績評価方法（Method of Evaluation）】

研究成果報告等の学修の成果に基づき行う。

【教科書（Required Textbook）】

教科書は特に定めない。配布資料等によって授業を進める。

【参考書（Reference Books）】

参考書・リーディングリストは、各学生の研究テーマ等に応じて、適宜指示する。

GEFIL 実践研究 (PHASE2) テーマ群の概要等

テーマ群	サステナビリティ	主幹メンター教員	福士 謙介
------	----------	----------	-------

社会を構成する最も小さな単位は個人である。その個人のサステナビリティは、家族、地域、社会、地球それぞれのサステナビリティに大きく依存している。個人の生活を守ること、地域社会を守るとは地球全体のサステナビリティが確保されていないと達成されない。サステナビリティは様々なスケールで達成されるべきであり、そのような考えのもと、様々な開発計画、産業活動等が実行されていくことが理想的である。本講義では世界の様々な地域で困難に直面している環境、健康、資源、開発、人材、産業、生活、文化、教育等の様々な事象をサステナビリティの観点から見つめ直し、その解決策をともに考えていきたい。

(授業キーワード)

サステナビリティ サステナビリティ学 持続可能性 資源 環境 社会 地球

テーマ群	グローバル・ヘルス	主幹メンター教員	渡辺 知保
------	-----------	----------	-------

グローバル・ヘルスの課題は多様だ。一方に世界の様々な地域が固有に抱える多様な健康問題があり、他方で地球上の人類にとって共通の健康問題がある。同じように見える課題でも途上国と先進国では様相が変わる。別の角度から眺めれば、臨床と予防という医療の範囲にとどまらず、人口・環境・社会・食糧（農業）・開発・持続可能性など多くの分野と接点を持つという意味においても極めて多様性に富んでいる。こうした意味で健康に関する課題は、多角的な視点と斬新な発想を育てる良いプラットフォームと言えよう。本テーマ群では、グローバル・ヘルスの領域における課題と様々な隣接領域との接点を学生が自ら見出し、グループ・ディスカッションによって課題解決のための有効な取り組みを探るものとする。可能な範囲で、世界における健康問題の実態に触れる機会を設けたい。

受講生は、現状のグローバル・ヘルスの中でどのような問題が扱われているのかを把握した上で、眠っている課題や解決の困難と思われる課題を同定する。その上で実際にどのような取り組みが行われているのか、取り組みに欠けているもの・必要なものは何なのか、取り組みの成功・失敗はどのような領域にどのようなインパクトを与えうるのかといった疑問を、できるだけ多角的に、多くの要素のつながりを重視しつつ検討することを修得する。

(授業キーワード)

健康の概念 感染症 非感染症 人口問題 食糧問題 栄養状態 環境問題 気候変動適応策 人為的生態系 医療支援 都市インフラ 開発

テーマ群	ピース・ビルディング	主幹メンター教員	藤原 帰一
------	------------	----------	-------

どのようにすれば、武力行使で引き裂かれた世界に安定した平和をもたらすことができるだろうか。国際紛争と内戦を含め、現代世界において展開する武力行使を対象として取り上げ、その発生する原因を解明するとともに、紛争解決の条件、紛争後の政治秩序形成や法制度形成、さらに再発防止のための措置、そしてまだ紛争が起きていない地域における予防外交について考えることがこの実践研究の目的である。この実践研究においては（１）内戦と国際紛争の現状、（２）宗教と紛争、（３）民族と紛争、（４）貧困と紛争、（５）テロとテロ組織、（６）介入と占領、（７）難民支援などの基本的事項について理解を深める一方、具体的な紛争を選び、その紛争における平和構築に関して自らの研究プロジェクトを実行しなければならない。ここでは、ただ特定の紛争について事実関係を祖述したり、あるいは特定の領域における研究のサーベイをするのではなく、そのような研究と具体的な紛争の理解を結びつけ、これまでにない新しい視点を発見することが目的である。

（授業キーワード）

平和構築 紛争処理 平和維持活動 難民支援 ナショナリズム 民族とエスニシティ
Peace building; Conflict resolution; Peace-keeping operation; refugee assistance;
nationalism; nation and ethnicity

テーマ群	ダイバーシティ	主幹メンター教員	園田 茂人
------	---------	----------	-------

文化の多様性を理解・尊重し、これを（多国籍）企業や行政機関、NGOなどで具体的な組織的行動に移すことのできる人材の育成を目指す。経済のグローバル化の進展は、一見すると「文化のフラット化」を生み出しているようだが、実際にはそうではない。組織・集団や民族・エスニシティ、国家などに具体的に体现される文化は、歴史の母斑を残しつつも、その差異と関係性がダイナミックに変化する状況にあって、異なる文化を抱えた人びとの協働を促し、新たな価値実現のための具体的な行動を起こすことが、今まで以上に求められている。本授業では、参加学生のさまざまな知的関心と問題意識を尊重しつつ、いくつかのグループをもとにした集中的な議論や活動を通して、最終成果のとりまとめまでの作業を行う。多文化状況を理解する知性と感性、これを具体的なアクションプランにまで落とし込む忍耐力と集中力、これを実現するための説得力と行動力の涵養が目標となる。

（授業キーワード）

文化の多様性 協働 新たな価値実現 アクションプラン

テーマ群	グローバル・エコノミー & マネジメント	主幹メンター教員	藤本 隆宏
------	-------------------------	----------	-------

世界中のどのような大舞台に立っても、その実力を余すことなく発揮できる人材の育成を目指す。世界経済の成長点の大きな変化やその反面での不安定さの増大など、今日の大組織が直面する課題の多くは、その解決のためにグローバルな視野やその力学の理解が不可欠な時代となっている。なかでも、企業経営を支えるイノベーションやコアコンピタンスの蓄積・活用も、もはやこうしたグローバルな力学の理解抜きには考えられない。日本の多くのグローバル企業がどのようにこうした課題に取り組んできたか、そこでの苦闘を具体的に取り上げることを通じてこれからのグローバルエコノミーの本質を探ることに挑戦する。そこでは、企業戦略のみならず、組織のありかた、リーダーシップ、そして企業人としての生き方に至るまで新たなものが求められてくるだろう。本授業では、参加学生の知的関心と今後の職業選択まで含めた進路についての意識を尊重し、いくつかのグループによる集中的な活動を通じて、成果の取りまとめを行う。グローバルな視野を備えた、逞しい（経営）リーダーとして成長するための視野と姿勢を身に着けることを目標としたい。

（授業キーワード）

世界の経済勢力図、グローバル企業経営、日本の競争力、イノベーション、コアコンピタンス、（経営）リーダーとしての生き方